

最上川流域から考えるムラを蘇らせる兆し

山形県民にとって、最上川は大変特別な存在だ。一昨年から庄内町清川というかつての最上川舟運の港町に住むようになってますますその感は深まる。

しかし最上川舟運の一大拠点であった清川も大正時代以後、鉄道と自動車道路網の整備にともなって舟運の役割は終わると共に、川港は洪水を防ぐための堤防の下に埋もれてしまった。今では地元住民でさえ住んでいる家のすぐ隣を流れる最上川に行くにも長い距離をぐるっと堤防を回っていかなければならず、川と地域の暮らしや生業との関係は大きく離れたものとなってしまった。最上川に特化した清川の本来あるべき生活の姿、住まい方の意味を失ったこと、「そこから清川の衰退がはじまったというわけだ」とある時、河川行政に携わる住民の一人が話していたのが印象に残っている。

最上川流域の農山漁村を訪ね歩いてみると同じような境遇のムラを数多く見かける。だが山形のムラは、まだまだかつてのその地に住もうための営み、知恵、技術を脈々と受け継いでいる。過疎化少子化だ、担い手がいないと言われて久しいが、今そこに住むお年寄りたちは元気に日々の暮らしを営んでいるものなのである。そうはいっても孤立無援のままではいわゆる「限界集落」と呼ばれる地域衰退を招くことになるだろう。それは、自然と織りなしあいながら形成されたムラの成り立ちの物語が忘れ去ることであり、次の時代に受け継ぐべき本当に豊かに生きるための知恵や技術を失うことを意味するのではないか。筆者のみならずムラの暮らしに接したことのある東北人、いや日本人ならばだれでも本能的に感じ取るのではないだろうか。

こうした状況の中、平成 20 年から山形県内の大学高等教育機関等で構成する「大学コンソーシアムやまがた」では、筆者を担当者にして「最上川学教育プロジェクト」というものに取り組んでいる。これは流域の農山漁村の住民と共に学びながら、地域に元気を取り戻すために役立つ研究や教育の在り方を模索する試みでもある。大学の立ち位置としてはコペルニクスの転回だと言えるだろう。一概には言えないが、大学はこれまで欧米の理論から学び、国内の研究や教育に生かしていくという伝統的姿勢があった。それを今度は国内の農山漁村の暮らしに目を向け、住民に学ぶことで自分たちの地に根差した研究教育を開拓していこうというものなのだ。今筆者はその道筋へ導くために微力を尽くす毎日を送っている。

そしてこの試みは当初大学では予期しなかったことだが、若者たちに新たな動きを生むことになった。住民と接し様々なワークショップや現地での活動にかかわってきた学生たちが、NPO 団体を立ち上げ組織的な取り組みを始めた。「流域のムラのみなさんを学ぶことで、それを受け継ぎ暮らしていくための新たな仕事を生み出していく」そして「卒業後も山形の田舎で仕事をしていきたい」というのが彼らの共通の目的だ。それはムラの伝統を「革新的に」受け継ぎながら現代に生かしていこうという挑戦的な試みであるとも言える。

この動きに連動するように行政も動きを見せ始めている。清川では、かつての最上川景観をベースにしながら、もう一度住民と川との絆を取り戻すための試みが始まっている。住民が主体となりながら様々なイベントやソフト事業の立ち上げると同時に、人が川に近づきやすくするための堤防の改良や川港の再生まで視野に入れた「かわまちづくり」計画の策定にも着手し始めた。地元から学び受け継ぎながら新たな地域づくりに役立てようという小さな取り組みは、様々な世代や主体とつながることで地域を蘇らせる大きな力を生み出そうとしているのである。

こうした動きが真にその目的を達成するのは、もちろん筆者の力だけでは不十分だ。地元住民や行政・大学などの関係機関、ヨソモンとしてかかわる学生達を初めとした外部者がより切実に自分たちのこととして広い視点を持ちながら継続的にかかわっていくことが出来るか、その潜在的な能力と度量も試されているのである。